

## 日常生活援助技術学習プログラムの 教員指導方法の違いによる学生の学習内容の検討

青木君恵・武田貴美子・縄 秀志・長岡沙紀子

(受理日 2012年9月28日, 受稿日 2012年12月13日)

### Learning of the Student by Difference in Teaching Method of Basic Nursing Skill Program for Daily Life Support

Kimie AOKI・Kimiko TAKEDA・Hideshi NAWA・Sakiko NAGAOKA

(Received Sept. 28, 2012, Accepted Dec. 13, 2012)

#### I. はじめに

本学の基礎看護学実習IIは、2年次の8月～9月に実施されている。実習目標の1つに、患者の病いの体験を理解し、患者の健康問題に対する必要な看護を考え、看護ケアを安全・安楽・個性をふまえて実施することとしている。学生にとって、受け持ち患者の看護ケアを安全・安楽・個性に配慮して実施することは容易なものではない。

臨地実習における学生の看護技術に関する研究では、学生は高い緊張感を持って実施していたり<sup>1)</sup>、基本技術を行うことに困難さを感じていたり<sup>2)</sup>、学内で学習した方法や設備が違うために技術を実施できない<sup>3)</sup>ということが報告されている。

本学の学生においても、看護技術に対する自信のなさから積極的に看護ケアに参加することができず、見学や看護計画を立案する段階でとどまってしまう傾向がみられていた。そこで、

実習前に看護技術を習得することで自信を持ち、実習で積極的に看護ケアが実施できるようになることを目的に、平成19年度より基礎看護学実習IIに向けて日常生活援助技術学習プログラム(以下、プログラムとする)を独自に開発し実施している。習得する技術項目は、実習で実施する頻度が高い日常生活援助技術(バイタルサイン測定、全身清拭、洗髪、足浴、車椅子移乗、リネン交換、爪切り)である。

平成21年度に先行研究<sup>4)</sup>(以下、平成21年度とする)として、学生2名がペアになって自己練習をし、学生一人一人に教員が指導を行うという方法(個別指導)に関する結果を報告した。この中でプログラムの課題としては、教員による評価期間が短いこと、評価に向けた自己練習の時間、パートナー学生の確保が困難であること、個々の教員による指導内容に違いがあることが挙げられた。これらを踏まえて、平成22年度は4～5名のグループで自己練習し、複数グループ合同による公開指導に変更した。指導方

法として1つのグループに看護技術を実施してもらい、指導する場面をモニターに映した。しかし、公開指導では学生一人一人への細やかな指導ができないことや、指導を受けていないグループの学生は見ているだけとなり、主体的な学生の学習の機会となり得ているのか疑問が残った。そこで、平成23年度は4～5名のグループで自己練習し、教員はグループごとに指導をすることにした。

本研究の目的は、年度ごとに教員指導の方法を変更してきたため、教員指導方法の違いによる学生の看護技術の習得状況やプログラムに対する取り組み状況にどのような違いがあるのかを明らかにし、また今後更なるプログラムの充実を図るための示唆を得ることである。

## II. 方法

### 1. 日常生活援助技術学習プログラムの概要

実習で実施する頻度の高い日常生活援助技術項目として、バイタルサイン測定、全身清拭(陰部洗浄含む)、洗髪(洗髪台・洗髪車)、足浴、車椅子移乗、リネン交換の6項目について、学生は自己練習に組み、教員指導を受けた。ただし、バイタルサイン測定、足浴、リネン交換については自己練習のみとした。自己練習は、4～5人のグループを組み、各項目1回は自己練習を行った上で教員指導を受けることとした。

教員指導は、平成22年度は4～5名のグループを12グループずつ集め、代表の1グループに指導し、他のグループ学生はモニターを通して指導内容を確認するという公開指導を行った。平成23年度は、4～5名の1グループごとの指導とした。

このプログラムの期間は、平成22年度は5月10日～8月12日、平成23年度は4月18日～7月23日で、授業の空き時間を活用した。学生が十分練習ができるように、実習室は平日9～20時、毎週土曜日11～16時を開放した。

また、日常生活援助技術項目は1年次後期に講義・演習は終了しており、各看護技術項目の手順や留意点を復習するための手段として、教員が作成したDVDを1グループにつき1枚配布した。

### 2. 対象

平成22年度、平成23年度の基礎看護学実習IIを終了した本学科2年生を対象とした。

### 3. 調査時期

基礎看護学実習IIの終了後とし、平成22年、平成23年ともに10月初旬に行った。

### 4. 調査内容

学生の看護技術の習得状況やプログラムに対する取り組み状況が得られるための質問紙を作成した。質問内容は、①プログラムの内容および実施方法に関する項目、②教員が実施した技術指導に関する項目、③看護技術の習得状況に関する項目である。各項目について、5段階もしくは3段階の選択肢と回答に対する理由についての自由記載の回答欄を設けたアンケート用紙を作成し、無記名で回答を得た。調査への依頼書とアンケート用紙については、平成22年度、平成23年度ともに同様のものを使用した。なお、5段階評価は、とても〇〇である5点、やや〇〇である4点、どちらともいえない3点、あまり〇〇でない2点、全く〇〇でない1点とした。3段階評価は、適切である3点、どちらとも

いえない2点、適切ではない1点とした。

## 5. データ収集方法

学生に本調査の目的および協力の依頼について文書と口頭で説明し、質問紙を配布した。回収においては教員の強制力が及ばないように自由に投函できる回収ボックスを2か所に配置し、約2週間の回収期間内に投函されたものを同意が得られたものとみなし、データとした。

## 6. 分析方法

各質問に対する選択肢の回答は、項目ごとに単純集計した。5段階評価による回答は年度ごとに点数化して平均点を出し、有意差についてはt検定を用いた。3段階評価による回答は、その割合を算出した。分析はWindows 7 Excelを用い、有意水準を5%とした。

## 7. 倫理的配慮

アンケート用紙を配布する際に本調査の趣旨を説明し、調査への協力は自由意志であること、調査への協力の有無は成績等の評価に影響しないこと、個人が特定されないように無記名であり、回答結果は個人が特定されないこと、得られたデータは今後のプログラムに関する検討お

よび研究以外で使用しないことについて、文書を用いて口頭で説明し、質問紙への回答により同意とみなした。

## III. 結果

### 1. アンケート回収結果

平成22年度は95名にアンケートを配布し、30名から回答が得られた(回収率31.6%)。平成23年度は86名にアンケートを配布し、53名から回答が得られた(回収率61.6%)。

### 2. 平成22年度と平成23年度の比較

教員指導方法の違いによって影響があると考えられる以下の8項目について結果を述べる。

#### 1) 教員指導の適切性 (図1)

教員指導が“適切である”と回答した割合は、公開指導を行った平成22年度は70.0%、1グループごとの指導を行った平成23年度は94.3%であり、平成23年度が高値を示した。

#### 2) 教員指導の必要性 (表1)

教員指導の必要性の平均値は、平成22年度は4.5点、平成23年度は4.9点で、1グループごとの指導を行った平成23年度が有意に高かった。

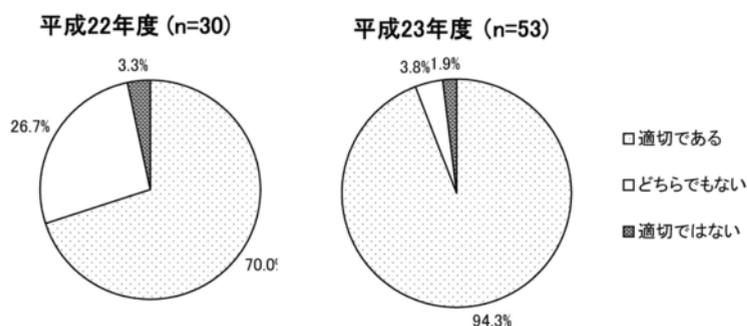


図1 教員指導の適切性

表1 平成22年度と平成23年度の比較

		平成 22 年度		平成 23 年度		p 値
		平均値	SD	平均値	SD	
教員指導の必要性		4.5	0.82	4.9	0.34	0.025*
プログラムへの学生の積極性		4.1	0.82	4.4	0.60	0.106
グループメンバーとの実施の有効性		4.1	1.05	4.5	0.87	0.093
看護技術習得の難しさ	バイタルサイン測定	3.5	0.94	2.9	0.99	0.004*
	清拭	3.9	0.94	4.0	0.81	0.746
	洗髪	3.8	0.99	3.6	0.93	0.491
	足浴	3.0	0.85	2.7	0.84	0.202
	車椅子移乗	3.4	1.00	3.7	0.83	0.233
看護技術に対する自信	バイタルサイン測定	4.3	0.64	4.1	0.93	0.228
	清拭	3.6	0.78	3.6	0.91	0.941
	洗髪	3.4	0.77	3.5	0.93	0.441
	足浴	3.8	0.87	3.9	0.83	0.405
	車椅子移乗	3.7	0.66	3.5	0.91	0.266
実習で役立ったか	バイタルサイン測定	4.9	0.43	4.8	0.43	0.667
	清拭	3.9	0.98	4.3	0.88	0.102
	洗髪	3.8	1.12	4.3	0.89	0.050
	足浴	3.9	1.13	4.4	0.74	0.019*
	車椅子移乗	3.7	1.00	3.8	0.99	0.638

\* p&lt;0.05

## 【評価の段階】

- 5：とても〇〇である  
 4：やや〇〇である  
 3：どちらともいえない  
 2：あまり〇〇でない  
 1：全く〇〇でない

## 3) プログラムへの学生の積極性 (表1)

プログラムへの学生の積極性の平均値は、平成22年度は4.1点、平成23年度は4.4点で、有意差は認められなかった。

## 4) グループメンバーとの実施の有効性 (表1)

グループメンバーとの実施の有効性の平均値は、平成22年度は4.1点、平成23年度は4.5点で、有意差は認められなかった。

## 5) 看護技術習得の難しさ (表1)

看護技術修得の難しさの平均値は、教員指導がなく自己練習のみの「バイタルサイン測定」で、平成22年度は3.5点、平成23年度は2.9点

で、有意差が認められたが、「足浴」では有意差は認められなかった。また、教員指導がある「全身清拭」「洗髪」「車椅子移乗」においては有意差が認められなかった。

## 6) 看護技術に対する自信 (表1)

看護技術に対する自信は、各項目とも有意差は認められなかった。

## 7) 実習で役立ったか (表1)

実習で役立ったかの平均値は、教員指導がなく自己練習のみの「足浴」で、平成22年度は3.9点、平成23年度は4.4点で、有意差が認められたが、教員指導がない「バイタルサイン測定」、

教員指導がある「全身清拭」「洗髪」「車椅子移乗」においては有意差が認められなかった。

#### IV. 考 察

教員指導について、指導が“適切である”と感じた学生はグループごとに指導を受けた平成23年度生の方が割合が高かったことから、公開指導のように集団で指導を行うより少人数で指導を行えるグループ指導の方がより有効であると言える。さらに、平成21年度の結果が教員による指導・評価を“適切である”と回答した学生が66.7%であった<sup>4)</sup>ことを加えると、個別指導よりは公開指導の方が、公開指導よりはグループ指導の方が適切であるということになる。私たち教員は、より個別的な指導をすることは学生にとって技術の習得につながると考えていたが、学生側からすると個別指導よりもグループ指導の方が適切であると認識していることが分かった。これは、看護技術を習得するには、学生1人の考えや意見に対しての指導をするよりグループメンバーの様々な考えや意見を引き出すことで指導の内容が深まり、より豊かなアドバイスにつながるのではないかと考える。公開指導では、学生の考えや意見を引き出すには限度があるため、グループ指導よりは有効性が低いのではないかと考えられる。また、グループ指導の方が適切であると認識する背景には、学生の特徴として個々に指導されることへの抵抗感があることも考えられる。個人指導は学生にとってできないことを指摘されることになり、指摘されることに慣れていない学生は素直に受け入れることができず、指導内容を活かすことにつながらない恐れがある。

教員指導の必要性については、公開指導より

もグループ指導の方が学生が感じる必要性は高かった。その背景として、グループ指導は4~5名で行うため、個々の学生が自分の疑問や技術について確認することができ、自分の技術の習得につなげやすいのではないかと考える。

看護技術習得の難しさについては、教員指導がない「バイタルサイン測定」のみ有意差がみられ、他の項目に有意差がみられなかったことから、教員指導の有無に関わらず、実際の患者を対象としない学校内での看護技術を練習している段階では、日常生活援助技術を習得することに難しさを感じていることが分かる。つまり、基礎看護学実習IIで受け持つ患者の病態や症状は様々であり、実習ではその患者に合わせた日常生活援助技術を実施することになる。しかし、学内での看護技術の練習では対象となる患者を意識した看護技術を習得することは困難であると考えられる。

看護技術に対する自信については、バイタルサイン測定以外の項目は平均点が3点台であり、このプログラムによって学生は何回も練習を繰り返していても看護技術に対する自信にはつながりにくいことが言える。また、教員指導方法の違いがあっても学生の自信に影響している結果とはならなかった。実際に、学生は基礎看護学実習IIで自分が受け持った患者の病態と症状に合わせて看護ケアを実施し、実施した看護ケアを評価し、また実施するという繰り返しをしている。この繰り返しをする中で、看護ケア後に患者の表情が良くなったり、患者から感謝の言葉をいただいたりといった反応から、より良い看護ケアを模索し、その患者に合わせた看護ケアが実施できるようになる。この過程が日常生活援助技術の向上にもつながり、自信にもつながっているのではないかと考える。基礎

看護学実習終了後や卒業前の看護技術に対する自信について、〈知識(知)〉〈手技(技)〉〈配慮(心)〉の一体化した技術をめざして行ったプログラムによって看護学生の自信度が上昇し<sup>5)</sup>、学内で技術練習を繰り返し行うことで学生の自信は高められる<sup>6,7)</sup>という報告もあるように、学生は実習前の繰り返しの練習で看護技術に自信をもてるのではなく、実習での患者への看護ケアを通して看護技術を習得できたという気持ちを持つことができ、それが自信につながっていくものと考えられる。

このプログラムが実習に役立ったかについては、年度別による差はないことから教員指導方法の違いによる影響は考えられない。プログラムへの積極性についても、年度別の平均点に大きな差はなく、授業スケジュールの過密さも変わりはないことから、学生が授業時間以外の空いた時間を捻出して自己練習をしており、学生によって練習回数も異なることを考えると、学生個々の看護技術習得に対する意識が大きく影響していると考えられる。学生は、実習を通して看護技術に自信を持っていくものと考えられることを先に述べたが、このプログラムは、実習で少しでも積極的に受け持ち患者に看護ケアを自信をもって実施できるようにするためのものであるため、その前段階として積極的に取り組めるようなプログラム内容・指導方法を検討していく必要がある。

平成21年度のようなペアの場合はお互いの時間、平成22・23年度のようなグループの場合はメンバー間の時間的な都合が合わないと練習できないといったマイナスな意見もあったが、それでも時間を合わせて取り組んでいる学生が多く見られていた。グループメンバー内でお互いに協力しながら看護技術の練習に取り組むこ

とは、同じ目標に向けて共に頑張るきっかけとなり、技術の確認をしながら練習を行うことで技術の向上を図ることにつながるのではないかと考えられる。

## V. 結 論

平成22年度の教員指導は、平成21年度のアンケート結果、学生の過密なカリキュラムの状況、教員のマンパワーの問題を踏まえて、公開指導という形をとらざるを得なかった。結果として、有意差という形では認められなかったものの、全体的にみる限りでは、個別指導より公開指導、公開指導よりグループ指導をした年度の方が比較的平均点が延びていることがうかがえた。公開指導は全体に共通した指導ができるという利点がある反面、個別指導・グループ指導ほど細やかな指導をすることは困難である。グループ指導においても教員間の指導方法を統一することは難しく、教員により少なからず違いは生じてしまうものである。個別指導においては、学生の個々の理解状況や看護技術の習得状況に応じた指導が直接できるが、様々な学生の意見を取り入れながらの指導はできない。それぞれ利点も欠点もある中で、学生の自主性があることによってグループ指導の方が指導方法として有効であることが考えられた。

## VI. 本研究の限界と今後の課題

学生は、このプログラムが終了した後に2クールに分かれて基礎看護学実習IIを実施している。全員の実習が終了した後にこのアンケートを実施しており、実際にプログラムが終了してから2か月近くたってからの実施となる。そ

のため、約2か月前の記憶を思い起こしてもらってアンケートに回答しているため、本研究において信憑性に欠ける部分があることは否めない。また、アンケート回収率が低いのもプログラム終了から時間が経っていることも影響していると考えられる。

今後の課題としては、学生の自主性をより伸ばすことができるよう、そして学生がより患者の状況に応じた看護ケアを自信持って実施できるようにするためのプログラム内容を検討して実施していくことである。さらに、教員個々の指導方法は違いがないとは言えず、指導方法の違いによっても適切性の評価に影響していることも考えられるため、教員の指導方法として統一すべき点について明確にしていくことも今後の課題である。

#### 引用文献

- 1) 奥小百合, 臺藏倫代, 鏡宮ゆかり, 他: 臨地実習において看護学生が経験した看護技術に対する緊張, 岐阜医療科学大学紀要, 6号, 121-127, 2012.
- 2) 杉本幸枝, 山本智恵子, 土井英子: 基礎看護学実習IIにおける臨床での援助技術の困難さの実態, インターナショナル Nursing Care Research, 10巻4号, 99-105, 2011.
- 3) 太田美枝, 森 尚子, 相原ひろみ, 他: 基礎看護実習において看護技術の実施時に学生が困った時にとる対処行動, 日本看護学会論文集: 看護教育, 40号, 170-172, 2010.
- 4) 武田貴美子, 縄 秀志, 青木君恵: 日常生活援助技術学習プログラムに対する学生の評価, 高崎健康福祉大学紀要, 第9号, 145-154, 2010.
- 5) 吉田礼子, 秋元とし子, 林真理子: 知・技・心の一体化をめざした基礎看護技術習得プログラム プログラム作成プロセスおよび試行と評価, 東海大学医療技術短期大学総合看護研究施設論文集, 17-18, 9-19, 2009.
- 6) 浅川和美, 高橋由紀, 川波公香, 他: 看護基礎教育における看護技術教育の検討—看護系大学生の臨地実習における看護技術経験状況と自信の程度—, 茨城県立医療大学紀要, 第13巻, 57-67, 2008.
- 7) 岩根直美, 水田真由美, 坂本由希子, 他: 基礎看護実習IIにおける学生の看護基本技術の体験と自信, 和歌山県立医科大学保健学部紀要, 第7巻, 69-76, 2011.